

鳥越神社

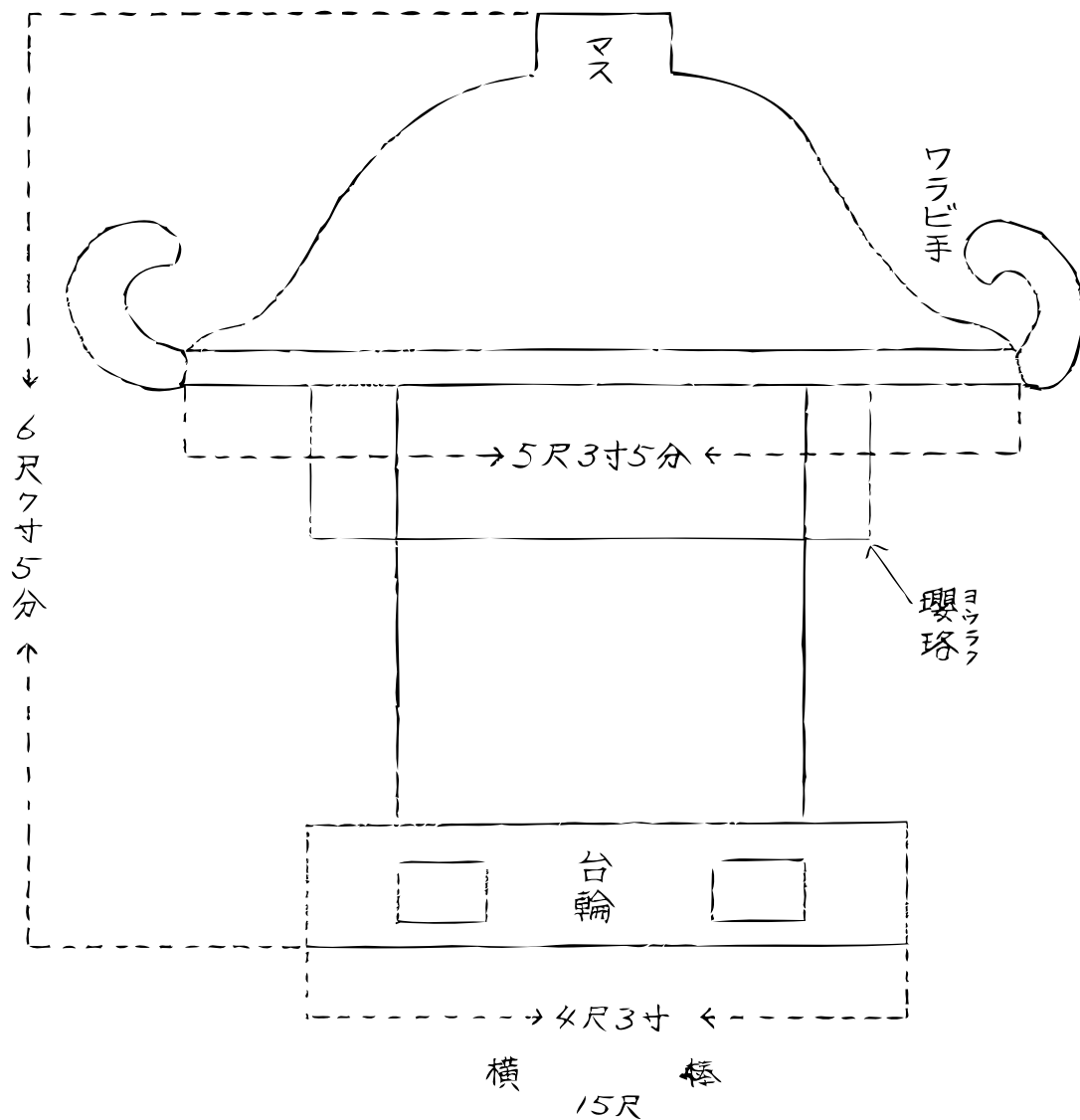
のならわし

拾八ヶ所睦会

のしきたり

戦後拾五年の歩み

鳥越神社大神輿（俗称千貫みこし）



元拾八ヶ町睦会 総代 神道直階位
前鳥越神社 権祢宣 藤澤 康

関東大震災により焼失、震災前の現形通り謹製す。

作者左の人々

ぬしや	木彫	飾職	金物	木地
竹	西村	星野	竹野内	牧野田
縄	村	野	内	田
直	雅	亀	正	志
吉	之	吉	文	賀

以上

拾八ヶ町睦会 町内神輿の大小の設定

昭和卅年五月代表会に於て大小神輿の設定す。

会規となる（台輪を以て基準とする）

大神輿 二尺二寸以上

中神輿 一尺六寸以上

小神輿 一尺五寸以下 を云う。

御神鏡と五色旗の奉納

終戦後連合敬神講時代、敬神講親睦世話人会をつくり、会費一ヶ月金五円を徴集、会計は浅三の小泉代表と筆者、先づ最初は御神鏡と御鏡台の奉納の儀が議決され、発注責任者は前田治八郎氏子総代、各製作担当者に注文謹製、御鏡の裏面に氏子各町名が彫刻されています。

其後に五色の御旗（大祭の時、社殿の向拝の前左右に飾る）拾流謹製奉納されたのであります。

御旗の順位

緑色御旗

黄色御旗

赤色御旗

白色御旗

紫色御旗

以上

神社并に敬神会と睦会の時代変遷

戦前の役員

大正三年鳥越神社氏子拾八ヶ町睦会誕生、大正十二年大震災と昭和二十年の戦災で書類焼失の為、詳細な立証が出来ないが、一部書残された当時の役員名を列挙して参考に供したい。

昭和七年度 役員 各通（略敬称）

睦会総代 佐久間 喜三郎

睦会総代 前田 治八郎

睦会総代 早川 永太郎

睦会総代 菊地 銀次郎

睦会総代 竹縄 直吉

睦会顧問 氏子総代 福山 安太郎

睦会顧問 阿部 友吉

昭和十七年度 役員（会長制となる）

睦会会長 前田 治八郎

睦会副会長 紅林 総太郎

睦会副会長 安藤 竹三郎

睦会会計 大竹 鉄五郎

睦会会計 堀田 亀吉

昭和十九年 役員

睦会会長 紅林 総太郎

睦会副会長 安藤 竹三郎

睦会副会長 青木 勘次郎

睦会会計 大竹 鉄五郎

睦会会計 堀田 亀吉

昭和二十年度、昭和二十三年度（戦争の為）

戦時中、戦後睦会解散まで（会員離散の為）

合議制 責任者 紅林 総太郎

日野 浩志

会計 藤沢 康

以後、鳥越神社奉賛会となる。

昭和二十年三月十日

アメリカ作戦の大空襲により社殿はおしくも戦火に見舞われたるも幸いにして御神体は御無事に御奉安せられました事は誠に喜ばしい限りでありました。

昭和二十年八月初旬

睦会臨時事務所（日野浩志氏宅）に於いて先代鏑木建男宮司、紅林総太郎、西鳥代表日野浩志、小島一代代表兼光、柳二代代表藤澤康、以上五名会合、氏子と睦会員の罹災者の家族の安否及び転地先の連絡方法の協議中、ソ連参戦の報が伝わり、国家存亡の一大事に終始無音顔色なく消然としてお互いに健在を次回に約して散会、今に思えばこれが先代宮司との永のお別れとなった。

昭和二十年八月十五日

天皇終戦の昭のラジオ放送

当夜先代宮司は氏子廿四ヶ町（当時は）を大抜詞を奉唱しつつ巡唱、翌十六日早朝、神楽殿に於いて逆屏風ま菰を敷いて伝来の短刀を持って古武士の作法通りに自刃せられました。誠に素晴らしいお方をなくしました。

昭和二十一年八月二十日

戦後の假宮（間口八尺、奥行五尺）落成、当時敬神講会長 堀江敏氏

昭和二十二年五月

拾八ヶ町睦会黄楊の木献木

昭和十七年太平洋戦争当時、睦会員の拠出金に依って本社大神輿の渡御を睦会独自の力を以って壮挙を画策し、月掛金一カ月分金壹円宛貯金（物価の安い時代）を議決実行にうつした。はからずも戦禍酣となり実行不可能の儘終戦となった。（前睦会）当時奉賛会紅林、日野、坂、藤沢会計相謀りこの積立残金を以って其趣意を記し神社向拜前左側に黄楊を献木す。

昭和二十二年五月

社殿再建築 議案の件 再建築 可決

昭和二十三年五月

鏑木宮司宅に於いて（假社務所）

社殿再建築案を再審議す。建築委員の選出、睦会は各町代表疎開の為揃わず残念乍ら解散を宣す。以後連合敬神講（後に連合敬神会）旧睦会は傘下に入る。

堀江敏 大谷才助 大塚正章 前田治八郎 岡野正 諸氏に旧睦を代表して

紅林総太郎の外、神社世話人松本亀松、神社世話人吉田清六、神社世話人藤沢康、以上構成協議立案し、参加各町の合議を得て実行にうつす案決定す。参加各町左記

宮元鳳徳講 浅三講 柳二祭礼講 二長町講 西鳥三番 鳥越式講 小島講 東三筋 北松山講 柳南講 以上拾ヶ町参加

御本社大神輿渡御の件 可決

連合敬神講主催のもとに渡御は先代末間の壮挙

先づ渡御路について防空壕及び残土の山積の為、順路は各町内一方交通を期し、可能条件は三間以上の道路を可とし、その調査委員として東三筋中村伝治、北松山中田福次と筆者の三名これに当たり渡御順路図を作成す。

問題は昇手の不足は白丁人夫五十名を以って補助とする。昼食は握飯を用意する。

昭和二十三年六月九日

例大祭式 奉行

昭和二十三年六月十日

御本社大神輿渡御

当日晴天、残存町内の太鼓参加

渡御主旨は、社殿再建と宝財の募金の完璧をお願いする目的でありました。

昭和二十四年六月五日

浅草南部連合祭り

榊神社 蔵前神社 須賀神社 銀杏八幡社 南部方面各社合同 同一期日執行

当鳥越神社氏子各町の連合神輿の渡御と太鼓 神社大鳥居前大通集合 西に向って当時(富永)現共積信用金庫前通り右折して小島町三角公園前にて解散し、各神輿は自町へ帰る(祭礼日は一期日壮挙、催しは各神社自由)。天気 曇り小雨

この催しが終って色々異論があり本年を以って合同祭りは中止となる。

鳥越神社の大祭日は以後は従前の通りとなる。

連合神輿参加町と代表

宮元服部 柳一北佐々木 西鳥三日野 鳥二田巻 小島一鈴木 山湘岩堀 東三中村 柳二藤沢

昭和二十四年六月十五日

拾八ヶ町睦会再起発起人会を柳二町会事務所に於いて左の目的で発起人会を開催解散して一ヶ年余経過、二十三年の大祭大神輿渡御に色々異論があり、やはりお祭は神輿渡御に関して独立の必要を認め再三岡野正氏より睦会復興の話があり、筆者熟考の結果皆様の声として茲に意を決し睦会復興の為、左の発起人を以て四方も方々に呼びかけ御賛会を頂き協議する(略敬称)。

西鳥三日野浩志 小島一鈴木正之助 東三筋中村伝吉 栄久会田中新一 南栄久鶴原元一 北松山中田福次 柳二藤沢康 七軒町方伊儀銀次郎
外参加者二長町長谷川太郎、松本亀松、岡野正
一、睦会再興案の件 異議なく可決

即ちに睦会規約起草委員に松本亀松氏に依嘱した。

（現在の睦会会則）

昭和二十四年度 假定 役員

睦会会長 紅林 総太郎

睦会副会長 日野 浩志

睦会副会長 田中 新一

睦会会計理事 藤沢 康

昭和二十五年八月九日

神社小祭御縁日 蔵前警察署より道路使用露店出店の件許可、従前通り毎月九の日

昭和二十六年二月上旬

戦前 紀元二千六百年祭 本社大神輿渡御先輩睦会の人々の活躍時代の事を思い出され、昭和二十六年六月は鳥越神社孝徳天皇の御代白雉二年五月（旧暦）鎮座壱千参百年祭に当る由緒を記念して、盛大な催しをくりひろげんと、江戸祭の鳥越の遺風を天下に知らしめさんと打絶えた祭のありかた後の世に基本をのこすべく茲に時代考証を松本亀松氏と企画を吉田清六氏と筆者が協力協議計画にかかり、着々と準備にかかった。戦後初めて神社のお揃着浴衣を高島屋に調製を依頼 氏子町の方に着用

昭和二十六年六月八日

鳳輦御巡幸行列（一日）

大太鼓 巡行渡御順路に従って

先導役 町役員二名 睦会員二名

金棒 鳶頭二名

底ぬけ屋台 担ぐ 歌舞伎座地方連

踊舞台 牛車 踊師匠、踊子連中

社名旗 壱流

猿田彦

御櫛 壱對

獅子頭 貳頭

御神宝 五領

警護役 氏子総代 役員 町役有志

神祇供奉 八名

鳶頭 を組 ほ組連中

拾八ヶ町睦会旗 壱流

手古舞 歌舞伎俳優二名

睦会渡御委員

鳳輦 御霊鎮座

宮司供奉 騎馬 口取一名

茶びん 前に茶釜、後に縁台（緋毛氈）天びんで担ぐ

殿り役 町役員二名 睦会員二名

昭和二十六年六月九日

例大祭式奉行

午後 南北に分かれて稚児行列、集合地は南は柳北、北は新堀小学校。神耘二名、鳶頭、金棒で先頭に隊伍を組んで二手に分れ各々神社参拝して解散

昭和二十六年六月十日

連合町神輿及び町太鼓の渡御

神社世話人、鳶頭先頭に立ち、獅子舞を各町の御神酒所を巡行

昭和二十六年九月

拾八ヶ町睦会総会

於銀鍋 事業報告、会計報告終つて昭和四十六年度役員改選

睦会総代 紅林 総太郎

睦会総代 日野 浩志

睦会総代 田中 新一

睦会総代兼会計 藤沢 康

睦会総代 鈴木 正之助

睦会庶務 鵜原 元一

睦会庶務 荒井 政雄

睦会会計 佐久間 大吉

睦会会計 小林 四郎

睦会監査 方伊儀 銀次郎

睦会監査 飯塚 隆吉

此期より正、副会長は総代制となる。

昭和二十七年六月 大祭（御神輿二日間渡御）

昭和二十七年六月七日 御本社御神輿渡御 北部

八日 御本社御神輿渡御 南部

二日間睦奉納手古舞二名 歌舞伎俳優 睦会員お揃着浴衣 一反金七五〇円

右浴衣の歩金を以て手古舞費に、なお不足金は町睦の町割金一千五百円宛徴集す。

昭和二十七年六月九日 例大祭式奉行

六月十二日 拾八ヶ町睦御神酒開

小島小学校に於て行ふ。会費 金三百円。

日を改めて幹部有志懇親会 伊藤大和館

昭和二十七年八月六日 紅林総代辞任 銀鍋に於いて送別会 以後睦会事務所 藤沢宅

昭和二十八年一月十五日 睦長老菊地銀次郎氏逝去

六月 睦会揃着肩抜き丹後ちりめん紺地縫上げ賃共 金五千五百円 上野松坂

屋調製 睦会お揃角帯 日本橋高島屋調製

右 お揃肩抜き着 帯共（前年度計画）本年渡し

昭和二十八年六月八日

連合町神輿渡御 南部より北部方面へ

町神輿連合の為、此期より神紋入りの町名陣旗を作製使用（この旗水上祭にも使用）

昭和二十七年六月九日 例大祭式奉行

六月十一日 睦会御神酒開 小島小学校

十月二十二日 睦会第二回定時総会

再起して二回目の総会 小島小学校に於て

昭和二十八年度役員改選

睦会総代 日野 浩志

睦会総代 田中 新一

睦会総代 藤沢 康

睦会総代 鈴木 正之助

睦会総代兼会計 小林 四郎

睦会庶務 荒井 政雄

睦会庶務 黒川 鶴蔵

睦会会計 佐久間 大吉

睦会監査 坂 兼光

睦会監査 方伊儀 銀次郎

睦会幹事長 長谷川 太郎

昭和二十九年 睦会員用伴天ごろ着地 松坂屋調製 睦会伴天用の平ぐけ 高島屋調製

昭和二十九年度大祭

七日 御本社大神輿渡御 南部方面 昼食箇所 柳二高橋氏子総代宅前

八日 御本社大神輿渡御 北部方面 昼食箇所 阿部川内田氏子総代宅前

六月九日例大祭式奉行

睦会御神酒開 期日 箇所詳細不明

昭和二十九年七月六日 睦代表会に於て睦お揃着 肩抜き糸織り調製案協議す。

九月 睦会天幕二張調製す

一張は、睦本会計より支出 一張は、睦会員一名宛金八十円抛出

昭和二十九年十一月五日 高木信久氏子総代逝去

其後西鳥三と鳥二睦は合併して以後鳥一となり、これより氏子廿三ヶ町となる。

昭和三十年三月十日 宮司舎弟胡緑小島久雄宮司逝去

昭和三十年度大祭

六月八日 連合町神輿渡御

大小町神輿三十六体と各町の太鼓参加まれに見る盛大であった。

参加町神輿多数の為、くじ引で神輿の配列順位を定めた事もあった。

其後、前年度本社御神輿渡御順路の順位で会合の席順位もこれにならった。席順の文句もこれにならなかった。

昭和三十年六月九日 例大祭式奉行

六月十二日 睦会御神酒開 会費金二千五百円 催箇所不明

六月二十四日～二十六日 三日間

第五回舞踊百扇会 東宝劇場にて催さる。舞踊内容は松本亀松先生の演出。

二長町神輿の出場 睦会員特別出演

昭和三十年七月 拾八ヶ町睦会定時総会 於銀鍋 会費七百元 事業報告、会計報告後

三十年度役員改選

睦会総代 日野 浩志

睦会総代 田中 新一

睦会総代 藤沢 康

睦会総代 鈴木 正之助

睦会総代兼会計 小林 四郎

睦会庶務 荒井 政雄

睦会庶務 黒川 鶴蔵

睦会会計 佐久間 大吉

睦会会計 林 春吉

睦会監査 坂 兼光

睦会監査 方伊儀 銀次郎

睦会幹事長 長谷川 太郎

昭和三十一年三月 睦会肩抜き風通織お召 金七千五百円 昭和三十一年五月中旬迄納品契約す。

上野松坂屋 原案糸織は雨天の場合を考慮して風通お召に変更

昭和三十一年六月七日 本社大神輿修復完成

三筋町の土屋工匠宅に於て引取り式を行い、本会員の昇手に依り神社に還御

昭和三十一年六月八日 本社御神輿渡御 北部巡幸

九日 例大祭式奉行

十日 本社御神輿渡御 南部巡幸

十三日 拾八ヶ町睦会御神酒開 熱海 静観荘 会費二千五百円

昭和三十一年七月二十日 拾八ヶ町睦会臨時総会

筆者藤沢 神社并に睦会の復興目的達成を見、ここに後進の途を開く為、総代聃を辞任、席上に於て名誉会員に推薦されました。後任に佐久間大吉氏総代に選出されました。

昭和三十一年六月八日 連合町神輿渡御

参加町神輿三十六体、本年度より志ん猿は神輿渡御は遠慮せらる。氏子町内としてのおつき合は続ける事を確約す。

昭和三十一年六月九日 例大祭式奉行

六月十三日 拾八ヶ町睦会御神酒開 熱海 富士屋ホテル 会費二千五百円

十二月十二日 神社再建の功労者大塚正章氏子総代逝去

昭和三十三年六月七日 本社御神輿渡御 南部 昼食箇所 浅三吉田真一郎氏宅

八日 本社御神輿渡御 北部 昼食箇所 三筋北佐久間大吉氏宅
九日 例大祭式奉行
十三日 拾八ヶ町睦会御神酒開 熱海 富士屋ホテル 会費二千五百円

昭和三十四年六月三日 社務所落成式奏楽奉納
当日舞台こけら落し 観世流宗家 外四家各家元出演 能楽 翁
外狂言師野村万蔵師の 末廣がり 等来賓あまた。

氏子総代外幹部 町有志の人々 睦会総代及幹部会員多数参加盛会を極む。

昭和三十四年六月七日 宵宮

恒例の睦わたりは本年より社務所二階広間に於て挨拶交換式の畧例となる。

昭和三十四年六月七日 連合町神輿の渡御 参加町神輿 三十八体

九日 例大祭式奉行

十四日 拾八ヶ町睦会御神酒開 熱海 金城館 会費二千五百円

十一月 拾八ヶ町睦会定時総会 神社社務所に於て開催す。

昭和三十五年六月七日 本社御神輿渡御 北部 昼食箇所 山湘前田良三総代宅

八日 本社御神輿渡御 南部 昼食箇所 東三奥野大吉総代宅

九日 例大祭式奉行

十三日 拾八ヶ町睦会御神酒開 伊東 川良 会費二千五百円

昭和三十九年五月二十二日

睦会中興の祖、功績者、元睦会会長前田治八郎氏子総代逝去

戦後の假本殿は西参道に遷宮

戦地彼地に名誉の戦死せられた英霊と銃後戦災の犠牲者の方々の御霊を毎月十九日に祭り奉さ
いしています。

尚追神として神社の崇敬者故人の御霊をもお祭り申上げ毎日日供を献饌奉仕しています。

後記本社御神輿上野松坂屋に展示陳列す。二回

以上、神社々睦会戦後十五ヶ年間の歩みの稿を終らせて頂きます。

◎引続いて行事余話の稿を続けます。

大被形代流しの今昔

戦前「大被形代受所」睦会製のポスターを各町代表が氏子町民の形代の納め所として奉仕代行（ポ
スターの図案は白地に水浅黄色あやめの花をあしらった）六月三十日迄に形代とお賽銭を一括し
て神社に納める。戦後は直接神社に形代を納める氏子が多くなった。

大被形代流しの行事

戦前は伝馬船二艘、一艘はお座船となり神賑及氏子総代、氏子世話人が同船、外の一艘は睦会員
乗船、船中のお茶受けは恒例として甘からだんご二本を頂く。式終了後は、大森の沢田屋又は鶴
屋かに料理で参加者合同で御神酒開をする。

なお料亭の都合で三の輪の銀世界、又は中野の日本閣で行った事もある。

睦会は別に有志を募って鬼怒川温泉山水閣が定宿で御神酒開を行った。

戦後はニタリ舟で、御座舟 総代舟 指導船 来賓舟 報導船 氏子船 睦会舟 出入舟 参加四十艘をこえた。社名旗、町名旗、舟番号旗、船列整えて出舟する様は源平瀬戸内の船出模様で盛観。

式後は各船自由行動、投網を楽しみ船中で天ぷらの食事。

お祭りとお神楽

お祭り意義とは要は神様をお慰め申上げる祭事であり、行事でもあります。

お祭の主要は神様の御由緒と縁起によるお祭と国家の制定したお祭と季節祭の春祭、夏祭、秋祭、農業及魚業に関係した行事等があります。祭式祈願の要旨は、国家安泰、五穀豊穣、悪疫退散、災害の防止、家内安全、商売繁盛等の祝詞の奏上をいたします。御神献は（御酒、新鮮な鮮魚、五穀、乾物）等をお供える。そして常に感謝の気持を表わす。そして神楽舞を奏樂してお慰め、目的のお願事を表わすのがお祭りの意義であります。

お神楽とは

神様に奏樂する雅樂と舞があり、民族的なおかぐら里神楽とがあります。

雅樂舞は神殿拝殿で舞う。代表的雅樂は越天楽、音取り等による浦安の舞等数あまた多くあり、雅樂器に笙、箏、太鼓、琵琶、竜笛、羯鼓等を用う。

里神楽は郷土色豊かな演奏と踊りは民俗的樂器とその名称

大拍子（大きなつづみ）、鉦（ヨスケ）、大太鼓（おおなり）、小太鼓（上下の位置で調べる）、笛（とんび）

里神楽の舞には古事記、日本書紀、古い伝説から出たものが多く、代表的なのは天孫降臨、稻荷山、悪鬼退治等幾多あります。

おかめ、ひよっとこ面で無言の動作、ひょうきんな三枚目おどりで大衆を笑わせます。

おはやしの数々

おはやしには、江戸囃し、神田囃し、かさい囃し等それぞれの流をくんだ数々のおはやしの団体が流派を競い、練磨した味を見せている。

江戸ばやしの代表では無形文化財の若山社中（蔵前在住）がいる。

大体の曲目は、打こみ、屋台、昇殿、鎌倉七丁目、上四丁目、下玉打、切り

外にキリン、カメイド、カンダルマ、夏祭カッコ（舞踊曲の娘道成寺に似たおはやし）、ニンベ（ひよっとこ踊りのはやし）等あり。

賑やかな夏祭

江戸の町が次第に発展するにつれ、人口が年ごとに増加にともない、夏になると雨乞いと流行の疫病が多いので、悪疫退散の祈願から神に心願の夏祭が多く盛んになったと云われています。

昔から春祭、秋祭は儀式だった祭事で庶民的な安易な気持を年一回の夏祭を心ゆくまで楽しんだものです。近頃は郷土色豊かなお祭行事にその土地の民謡を組入れて、ふるさと特色の派手なお祭りもあり、その時代のうつりかわりをお知らせ。又子供本位なリクレーションとして賑やかさが

あり、これもお時勢と云うもの。

鳥越神社祭式太鼓

神社古来の口伝 宮司の許を得て本書で初めて公開

祭式次第 神祇参進く着床、太鼓打ち儀 七五三（各間をおいて打つ） それぞれの太鼓間に打込みく后二鼓打つ

祭式 終って神祇退出の太鼓打ちの儀 （各間をおいて打つ）三の太鼓の終りに乱れ打ちで、后で式鼓打ちで終る。

○睦会会員構成としきたり

昔睦会発足時代、睦会会員数限定申合せが出来ていた。町内居住世帯数五十戸に対し会員一名と選定していた。当時の会員数は百六十余名位に限られていた。

発言権と投票数の数の権利の確保であるから町に欠員がなければ会員になれなかったので相当羽振りをきかせていた。

心がまえとして第一に身体をはって働きの出来る者、又交際上手なつき合の広い顔役の人を人選の要旨とした。

中には異例な町睦の人がいた。柳一北の西川代表は親子二人で町内睦を御して又睦会本部でも右翼のうるさがたの人であった。

会員はがいて道楽者が多かった。歌は新内、清元、手踊り等かくし芸を持って座敷を賑やかにするだけの力量があり、余芸としては花札、遊廊遊び等は心得たもので、新入会が入ると先輩が一通り伝習してくれる。又、とつさに駄洒落をとばし又よく人のあげ足をとるが大した喧嘩にはならず大笑いでおさまる。言葉は野趣的で聒人肌の氣ぶう。ちよつと江戸前の意気な身ごしらえの風格があり（俗にイナセと云う）、現代旦那睦とはオモムキをことにする。

お互いに呼合う時は町の名で呼び合う。睦会本部の会議に出席しても新参者は口がきけず、反対意見を申出ると「お前はいつ睦に入ったのだ、出直して来い」と云われるのがおちだ。祭と睦のしきたり等を聞くと大衆の前で恥をかく。常に祭まいと祭り中と祭の終り等一切と自町と他町の有様を頭に入れ、おぼえるより他にない。四、五年経たなければ一人前の睦の人ではない。大祭中に面頭向って見ると目つきにおちつきがない。新会員だなど直ぐにわかる。段々と年を経ると氣づかれ、祭が終るとホツとする。

○睦会入会の新会員の心得

現在もそのしきたりをやっている。

町代表の差添えで会合の席へ参上して、其場合睦幹事にお披露して頂き、町代表よりの口添えで（本人を宜しくお引廻しの程をお願いします）口上をしてもらい、御神酒料を包んで差出して初めて睦会員になれるのである。

睦会員は神輿を昇くばかりが睦ではない。祭そのものの形態をよく覚える事だ。心得として筋の通らぬ事は決して言うべきではない。

○昔の拾八ヶ町睦会の総会 小島学校

定時総会、式次第中、会計報告は担当の会計が口頭で総収入、総支出、差引金の有高のみ報告（報

告書は作らず）異論なく通過、役員の選挙は事前に総代及幹部が予め相談して予選して置いて、総代（議長）に指名権の賛同を得て指名、総代は絶対の権限者だ（そんな乱暴な事は通らぬが昔は通った）。会費 金一円程度 折詰と酒々散会
会費は安い。大正末期の戦前の話です。

○睦会お揃着の変遷

戦前 ○白地一色染の浴衣 二回

○鳴海しぼりの浴衣

○角帯新博多織グリーン地、表白の献上 うらは白色の一本独古

○結城がすりの紬織 浅草松屋調製

戦後 ○丹後ちりめん 紺地白ぬき肩抜き 松坂屋調製

○角帯金茶地十八文字角つなぎ独古模様 うら黒地 白ぬき博多献上 高島屋調製

○纏天く拾八睦角つなぎ模様 着地ごろ 松坂屋調製

○風通お召織 従来の肩抜き模様と同じ 高島屋調製

○纏天用 平ぐけグリーン色 高島屋調製

睦会纏天 拾八町睦会支給 平常用黒紺地木綿 松坂屋製

常使用 拾八町睦会支給 礼装用黒紺地紬織 松坂屋製

○町睦のお祭りと仕度のひきたり

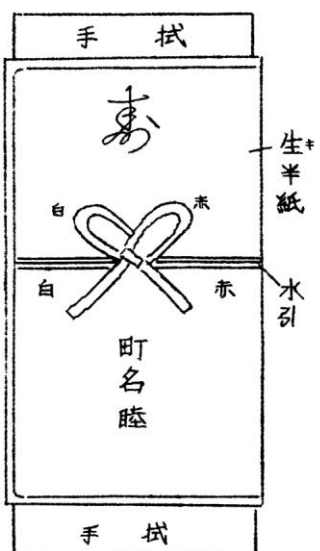
先 町内の締切り

隣町との境の四辻に笹竹、へ縄、紙垂、町名入りの高張提灯両隅に二ヶ所 計八ヶ所に二五分の柱で建る。これより自町である事を表示する。

御神輿の手入れ、神具の調度、御假屋、御神酒所の設営、幣束拍子木、金棒、御神饌、高張提灯、手丸提灯、細提灯、砂、塩等

次 わたり用の手拭の用意（睦正式わたり手拭）

手拭は二つ折り重ねて直三つ折る。生半紙に赤白の水引花結び、寿の一字上位に書く。町名睦下位に書入れる。



次 町の宵宮の行事

以前わたりは先づ神社に参拝、次は宮元より順次各町を廻る。昔は此日に神輿を昇いで神社の神前で御霊入れをお願いした。（今では神輿が出張して御霊入れが行われる）。終って御神酒を下げて祭礼中無事に執り行われる様祝盃を重ね、もりそばを喰べて宵宮を祝う事が睦のしきたりである。

祭礼中の期間（昼間）は決して酒気をおびる事を堅く禁じていた。

○伝統的歴史のある睦宮入道中

或年 御本社御神輿渡御順路を調査の時、宮入順路最終の町、鳥越通りよりクライマックスの睦宮入道中を睦に替って鳥越が道中をおつとめすると、睦先輩（名を秘す）が強引に注文をつけ、ここに居合わせた睦幹部全員が賛意を表し、あやふくこの睦の生命とするしきたりの宮入道中を最終町内に奪われんとする時、列席の浅三鍋田英治氏の発言により破かいせんとする行為に、その寸前の助言により守られました事は、鍋田氏の勇氣ある理解に感謝する次第であります。そして会員諸氏のお協力の賜として現今に至りました当時を思いうかべて感泣しております。

現在では鳥越夜祭として拾八ヶ町睦の誇りであり宮入り道中は観光的な存在となり、睦のこ一番の見世ばであり、又群集をして大向うをうならせる壮観、いやがうえにも感嘆の一字につきま

宮元睦宮入道中奉仕の復活

戦後 御本社御神輿渡御完行が決した時戦前の例に習い道中行事に宮元睦に恒例の大役を、日野氏と私が時の宮元睦松本代表にこの一大行事を実行するか否やを問合せたところ松本代表は敢然として実行を引受け確約したが、当時の人手不足と食料状態の最悪の時はたして実行出来得るか否や心痛の種でありました。万一卑手不充分の場合は睦会員をして補助的応援すべく腹を決めていた。当日最終町内終り宮元睦との受渡しの時衣類不足の時、全員にランニングシャツに黒々と宮元名入りを着せて当日の大役をつつがなくつとめられました事は賞賛に価する。又責任者も嬉しかった事だろう。

故松本代表の功績誠に大いに買うべきであります。

宮出しの仕末記

次の年御本社御神輿の睦宮出しの時の出来事、拍子木の奉仕者紅林総代が表鳥居に出興した御神輿についてそのまま西鳥居の近くで拍子木を打って駐輿してしまった。

これはしまった、時すでに遅く、宮元睦が表鳥居前で受渡しを待機し先頭には宮元睦元かえり咲きの、かつての睦会副会長青木勘次郎氏（中栄久より転居）大先輩が何か云わんとして待ちかまえている。時の進行委員長の私は紅林総代の責任とも云えず、青木大先輩は顔色そう白となり、鳥居前三尺の受渡しは昔からのお常法だ。神輿を引返せとの難題、そうさせては睦の恥と思い、とつさに鳥居前三尺は昔から聞いているが、表鳥居前三尺とは聞いている。あすもこの鳥居前だ（西鳥居）、文句を言わず、宮元睦は受けるのが順当だと云いきつたが、青木先輩もさるもの、今日のところは委員長の差図に従うが、此後の受渡場所の間違いをおこさない事の確約と今夜の宮入道中には時間を十分余分に認めると云われ、時刻々とせまり仕方なく私の腹で承認してその場をつくろった。その日最後の宮入道中の時、先輩の顔を立て、恥もかかずに大儀は終ったが、冷汗をかいいた事もありました。

御本社御神輿渡御道中の余談

或る年渡御順路作成の時、鳥一代表より（特に名を秘す）町内渡御の希望図の案を出され、一見すると偏重する箇所あり（当時西鳥三と鳥二合併した時点）もし之を実行すると後日町の苦情が出るが、当睦ではその責任は負えないが宜しいかと念をおしたら、迷惑を掛けない事を条件に渡

御図を作成した。

祭りはクライマックスに入らんとする渡御当日表鳥居前にて、故日野総代が神輿の台に乗り一条の訓示中に時間の厳守と渡御順路の変更は絶対に認めないと言い切ってしまった。さあ困った。御神輿は順次進行して行く。日野総代と鳥一問題、どう解決してよいか悩みは深い。ままよ、どうなる事かと思つて進行。いよいよ問題の旧鳥二町内通らず通過する直前鳥越町内役員が飛んで来て、元代表荒井氏の前の大通りを是非渡御してほしいと申出有り（図面にはカットしてあり）急な場合、貴町の代表を呼んでほしい、代表の目的通り作成したもの、今更私が勝手な振舞は出来ぬと申渡した。

又日野氏の早朝訓示もあり、尚日野総代を至急現場に来てほしいと連絡員を以てさがす。日野総代と代表も私の前に顔を見せず時はたつ。問題は小島と鳥越の境の問題、昔からこの両町の睦は仲が悪く、祭になると日野、鈴木両氏は喧嘩することがたびたびで、この解決には順路の次の町、小島をうまく説得するにしかずと考え、小島睦の所に立っている鈴木総代の前へ、おい小島、ところでどうだい、おれの云う事を聞いて呉れないか、お前は江戸っ子だ、ご覧の通りの有様、お前の顔の立つ様取りはかるからおれにまかせて呉れ、と申込んで心良く承知させ、所で鳥越の方々に今更怪我人を出したくないから鳥越の役員の方々はここへ整列して睦の渡御委員と小島睦の人々に何分宜しくお願いしますと頭を下げればそちらの言い分を通して丸く納め様と申出た。鳥越町役員は差図通りに従つて呉れたので、両者と睦と町役員の顔を立て、さして問題にもならず手締めをし、問題は水に流した。日頃、日野、鈴木、小島の喧嘩には私がいつも仲裁に入つたあ

いだがらだので顔を立て呉れた事は有難く思っている。今は墓の下で笑っているかも知れない。鈴木氏は案外にさっぱりした男で当時はよい気分であつたろう。今は墓の下で笑っているかも知れない。

人情ある睦会

戦前 町睦会員で歳の暮れになると（おもに耽人衆）台所のやりくりがつかぬ家庭があつた（よく落語に出てくる様な）

当鳥越神社の境内には睦会の特権の場所があり（テキヤの権限外の）表鳥居の内側九尺の所場（表鳥居三尺は睦会）言葉では三尺と云うが言葉のあやで九尺御免の土地、睦会員貧困の人に貸与えた。期間は十日間がお常法。町の友だちが資本金二十円を貸与えて丸太小屋を造り（ガサ）正月のお飾りを仕入れて商をさせ、それを約四倍位が売値、その外にご祝儀ものだからいくらかつけて呉れるから約百円位となる。キワものと云う物は法外な値がつく。睦会員は成可く買ってやる様にする。これをタスカリと云う。別に此人を下げすむ様な事はしない。筆者の代には三人位の人がこの恩恵を受けた様に覚えている。これなどは人情味ある睦の小話として伝えたい。

祭と顔役の流をくむ末輩連の余話

昔から祭になると神酒所へ因念につけに「ハイダシ」にくる輩が多かつた。これらの連中にも多少の三分の利もあるが、町々では困り楽しい祭もこわされる事が多かつた。

これらの者は、一家親分身内衆の親父御や兄貴ともなると筋を通した話ならわかる人だが、流をくむ末輩は弱身をかくし空威張して柄の無い所へ柄をつけて因念を吹っかけるのが常道だ。しかし毒には毒をもって征するの譬の通り、この人達を利用してお互いに楽しくお祭を決行したのが鍋田英治睦総代。鍋田氏はもと小島町で育ち、小島若睦の一人、戦時中転居先の亀戸天神社で氏

子堅川睦として氏神天神様の崇敬者、土地の顔役親分衆とも附合いも多く、これらの縁故で、鳥越祭にこれ等の人達に神社の纏天を着せ（俗に金しぼりの術）神輿を昇がせ、他のやくざ者の盾とし町と睦にも協力させる様にした。即ち、仕掛人の影の功績が大きい。しかし、小言は云うべし、酒は買うべしの譬の通り日頃より目に見えない所に私財を使われた。江戸ッ子肌と云うか、聒人肌と云うのか、義理と人情に生きる人であるから人を御する力も大きい。

筋の通らぬ事についてはちよつとうるさい人だが話は早い。神社の為に影になり日向になり尽された事を特記す。

編集後記

私も下町育ち、祖母が武家育ちの為、教育に対して厳しく、漢字をいささか勉強、二十五、六才頃町内睦の人より睦入会を再三すめられましたが祖母に反対を受け、その機を逸し、祖母死去後昭和十一年に柳二睦に入会、睦先輩に男の横道一通りを御親切にも教えられ、睦の楽しさ喜びを感謝しています。

ある時発心して、山嶽神道宗教に入魂修行の道に入りました。その間に睦代表、理事、総代聒を歴任、総代辞任後睦会名誉会員に推薦されました。

晩年、昭和三十九年、国学院神道部に入講、神聒の道をいささか会得、神社本庁より神道階位、直階の位を授かり鳥越神社権称宣聒の役聒を委嘱されました。神社に謹仕すること十ヶ年、よる年なみの為昭和四十九年二月二十八日付を以て退聒いたしました。

本書を編輯するに当たり神社のナラワシと睦のシキタリ、睦の歩みの道を故人及び現在の大先輩諸氏の功績と私の体験を綴ったのであります。

現在の鳥越神社を盛り上げたお尽力は睦幹部の方々と共に協力した睦会員の人々、それに氏子各位の皆々様の御理解ある御援助の賜と存じております。つたない筆を止めるに当たり伏して皆々様の御繁栄と御健康を祈願いたします。

藤澤 康

昭和五十年記 七十四才